様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６２２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１２２２７

研究課題名（和文）クリティカルケア看護師のEnd of Life Careとレジリエンスの日米研究

研究課題名（英文）Comparative Study of End of Life Care and Resilience of Critical Care Nurses in Japan and the United States

研究代表者
大木　友美（Tomomi, Oki）

昭和大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：６０３８３５５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、クリティカルケア看護師のEnd of Life Careにおけるレジリエンスとその関連要因を明らかにすること、米国で調査を行い、日米比較し、わが国におけるクリティカルケア看護師のレジリエンスを高める方略を検討することを目的とした。その結果、End of Life Careへの影響は、資質的レジリエンスよりも獲得的レジリエンスや看護師経験が大きく影響していた。また、楽観性や他者理解、社交性に関するレジリエンスも影響していた。End of Life Careへの前向きな態度を持つために、看護師経験の蓄積のみならず、大学院での教育や後天的に獲得可能なレジリエンスを高める必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
クリティカルケア看護師のEnd of Life Careに関わるレジリエンスの特徴が明らかになることによって、レジリエンス特性を高める方略が提案への一助となる。これらからクリティカルケア看護師の質の維持と向上、看護師の離職防止やバーンアウトの回避が期待できる。加えて、質の高いEnd of Life Careを提供できる看護師育成が可能になる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify resilience and related factors in End of Life Care of critical care nurses. Furthermore, we conducted a survey in the United States, compared the results between Japan and the United States, and aimed to propose a strategy to improve the resilience of critical care nurses in Japan.
As a result, acquired resilience and nursing experience had a greater impact than qualified resilience as a positive influence on End of Life Care and terminal care. Optimism, understanding of others, and resilience related to sociability were also influential. In order to have a positive attitude toward End of Life Care, it was suggested that it is necessary not only to accumulate experience as a nurse, but also to enhance graduate school education and resilience that can be acquired later.

研究分野：臨床看護学

キーワード：クリティカルケア　End of Life Care　看護師　レジリエンス　日米比較

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

クリティカルケアの主な目的は、急激な生命の危機的状況の患者を回復させることである。しかし、クリティカルな状況は、場合によっては死へと向かうこともある。すべての死のうち 2 割強が ICU 入室患者の死だと報告されている（Angus,2004）。ICU での患者の死の捉え方は個々の価値観、文化、宗教的な背景などが関係するため複雑である。また救命を第一に考える医療現場では、死や End of Life Care を視野に入れて患者と関わることが非常に難しい。End of Life Care とは人々の生活、人生の終焉を意味する。すべての人に End of Life Care はあり、クリティカルケア分野も例外ではない。クリティカルな現場では、急速に死のプロセスを辿るケースや改善や悪化を繰り返しながら徐々に死に至るケースも少なくない。医療者にとって回復の希望を持つ家族へ患者の悪い状況を伝えることや DNAR（Do Not Attempt Resuscitation）、治療から緩和ケアへの移行、死について話し合うことは困難であり、大きなストレスを感じる。終末期患者のケアを体験することが多い臨床看護師は、看護師としての役割、死との向かい合い、患者との人間関係に関係するストレスが高いと報告されており（東口,1998）、クリティカルケアにおける End of Life Care に携わる看護師のストレスはより一層高いことが考えられる（平成 25～28 年度挑戦的萌芽研究、大木友美）。

レジリエンスとは医療の現場では、さまざまな困難によりストレスが生じるが、その逆境を克服し、困難を乗り越えて適応していく心理的能力であるレジリエンス特性は看護師に求められるものであり、特にストレスが大きいクリティカルケア看護師にはより一層求められる資質である。我が国におけるクリティカルケア看護師を対象にしたレジリエンスに関する先行研究について文献で研究動向をみると、看護師を対象にしたレジリエンス研究は少なく、クリティカルケア看護師を対象としたものは 0 件であった。

このように我が国ではクリティカルケアでのレジリエンスはもちろん End of Life Care との関連性を示した研究はまったくない。またレジリエンスにおける国外との比較も皆無である。

国外におけるクリティカルケア看護師を対象にしたレジリエンスに関する先行研究について文献で研究動向をみると、看護師を対象にしたレジリエンス研究は少なく、そのうちクリティカルに該当するのは 6 件であった。

このように国外では少ない対象者にインタビューによって体験構造を明らかにしたものが多く、中でも End of Life Care に関するものは 1 件であった。また横断的研究では End of Life Care に関するものは皆無であり、また外国との比較をした研究はなかった

２．研究の目的

本研究は、クリティカルケア看護師の End of Life Care におけるレジリエンスとその関連要因を明らかにすることを目的とする。またクリティカルケア先進国の米国での調査も同時に行い、その結果から日米の比較をし、日本と米国の特徴や違いを明らかにする。これらによってわが国におけるクリティカルケア看護師のレジリエンスを高める方略を検討する。

３．研究の方法

本研究は、平成 29 年度か 4 年間にわたり、4 つの構成で研究計画を設定していた。しかし、この間、世界中でコロナウイルス感染症の流行があり、研究対象となる国内外の ICU での調査の実施が難しくなったため、研究期間を 1 年間延長した。

（１）文献検討（平成 29 年度）

本テーマに関連あるテーマ、内容について文献検索データベースの医学中央雑誌および PubMed 等を用いてあらためて文献を収集した。クリティカルケア看護師、End of Life Care やレジリエンスに関わる資料、および当初の計画で示していた関連概念に関する資料およびそれらを測定する尺度や資料を過去 10 年間の国内外の文献から収集した。この結果を活用し、研究仮説を立て、質問紙完成につなげた。

（２）調査研究（平成 30 年度～）

(1) の結果を踏まえ、以下のように計画した。

応募者の過去の研究成果をもとに、クリティカルケア看護において End of Life Care 場面で生じる困難から自作の質問紙を作成した。研究代表者および分担者や臨床看護師の協力者と協議し、臨床での現状を理解するためのインタビュー項目を抽出した。次に、病院の ICU 部門で勤務し、専門的な活動をする専門看護師や認定看護師からインタビューを実施した。内容についての分析は、質的内容分析、およびテキストマイニングで言語分析を行い、質問紙の項目を検討した。次に、第 1 段階で作成した質問紙および仮説検証に必要な尺度を組み合わせて「クリティカルケア看護師の End of Life Care に関わるレジリエンス」質問紙を完成した。米国での調査に備え、質問紙の英語版を作成した。英語版質問紙作成および米国での調査は、米国留学経験のある研究分担者が行った。日本語版、英語版の質問紙はそれぞれ日本と米国でパイロットスタディを行い、最終的な本調査に備えた。これをもとに、本調査を計画・実施した。

４．研究成果

（１）文献検討

①我が国におけるクリティカルケア看護師を対象にしたレジリエンスに関する先行研究

研究開始後、研究対象期間を 10 年に設定して研究動向をみると、看護師を対象にしたレジリエンス研究は 76 件であった。内容を概観すると看護師のレジリエンスを対象にしたもの 60 件、看護師の認識した患者や家族のレジリエンスを対象にしたもの 12 件、看護学生のレジリエンスを対象にしたもの 4 件であった。クリティカルケア看護師のレジリエンスに関する研究は 2 件あり、急性期病院における看護師レジリエンス調査（甘利,2017）クリティカルケア看護師の感情を揺さぶられる印象的な体験（辻本,2015）であったが、直接的にレジリエンスを測定したのは前者の 1 件だけであった。クリティカルケアの看護師のレジリエンスおよび End of Life Care に関連した文献は 0 件であった。このように我が国ではクリティカルケア看護師のレジリエンスに関しては若干の研究が見られるが、End of Life Care との関連性を示した研究はまったくなかった。またレジリエンスにおける国外との比較も皆無であった。

②国外におけるクリティカルケア看護師を対象にしたレジリエンスに関する先行研究

文献で研究動向をみると、看護師を対象にしたレジリエンス研究は 16 件であり、そのうちクリティカルに該当するのは 6 件、質的研究 4 件、横断研究 2 件であった。質的研究は、重症熱傷病棟看護師の体験からレジリエンス構成概念を調査（Kornhaber,2011）、救急ケア看護師の専門的レジリエンスを築く構造（Hodges,2010）、急性期病院に勤務する新人看護師のレジリエンスを発展させるプロセス（Hodges,2008）、救命病棟での終末期の意思決定に関わる看護師の役割（Bach,2009）、横断研究は急性期病棟に勤務する看護師の職務満足と職務継続意思（Larrabee,2010）、ICU 看護師の健全な精神とレジリエンス（Mealer,2011）であった。このように国外では少ない対象者にインタビューによって体験構造を明らかにしたもの)が多く、中でも End of Life Care に関するものは 1 件であった。また横断的研究では End of Life Care に関するものは皆無であり、また外国との比較をした研究はなかった。

（２）調査研究

全国のクリティカルケア部門を有する病院に研究目的を記載したアンケート依頼の文書等を郵送した。研究承諾者に対して Web 方式で調査を実施した。日本国内で得られた回答は 29 病院の 264 名、有効回答は 260 名（98.5%）、平均年齢は 33.0±8.9 歳であった。

本研究において、End of Life Care、終末期ケアへの前向きな影響として、資質的レジリエンスよりも獲得的レジリエンスや看護師経験が大きく影響していた。また、楽観性や他者理解、社交性などのレジリエンスも影響していた。終末期ケアへの前向きな態度を持つためには、看護師としての経験の蓄積のみならず、大学院での教育や後天的に獲得可能なレジリエンスを高める必要性が示唆された。個人の要因、特に首尾一貫性の感覚、終末期ケアに関する宗教的信念、患者のケアに自信を持っているなどの自己観は、患者をケアするクリティカルケア看護師のレジリエンスにとって最も重要な要因であることがわかった。クリティカル領域で終末期ケアを行う上で、 社会的支援、特に職場での支援も重要である。より高いレベルのレジリエンスは、臨床看護師としての長年経験と終末期ケアの前向きな姿勢と有意に関連していた。また首尾一貫感覚（SOC）が高く、1 人以上の子供がいる、終末期ケアについての教育を受けている、認定看護師/専門看護師資格、終末期患者との経験、経験豊富な患者の死亡数、職場に満足、医師との関係にジレンマがある者が職場での看護スキルに自信を持っていた。

次に、クリティカルケア看護師のターミナルケア態度尺度と二次元レジリエンス要因尺度の二次元構造を活用し、交絡因子を調整し、関連性を明らかにした。結果、ターミナルケア態度への前向きな影響としては資質的レジリエンスよりも獲得的レジリエンスや看護師経験が大きく影響していた。また、楽観性や他者理解、社交性などのレジリエンスも影響していた。ターミナルケア態度への前向きな態度を持つためには、看護師としての経験の蓄積のみならず、大学院での教育や後天的に獲得可能なレジリエンスを高める必要性が示唆された。

クリティカルケア看護師の専門の経験年数とレジリエンスの関係を明らかにした。5 年以上と未満の経験年数で分けて差を検討した。5 年以上の急性期ケア部門での経験がある看護師の方が、5 年未満の看護師よりも「資質的レジリエンス」「獲得的レジリエンス」「総合点」が有意に高かった。2 次元構造でみると 5 年以上の経験の看護師が、資質的レジリエンスの「楽観性」、「行動力」、獲得的レジリエンスの「問題解決思考」、「自己理解」において有意に高かった。

クリティカルケア看護師の専門の経験年数とターミナルケア態度を調査した。クリティカルケア経験年数 5 年以上と 5 年未満の 2 群に分けて分析した結果、それぞれの群でターミナルケア態度「死にゆく患者へのケアの前向きさ」の得点の中央値（範囲）は、60.0（43-78）および 55.5（39-76）（p＜.001)、「患者・家族を中心とするケアの認識」の得点は、50.0（36-61）および 48.0（25-59）（p＝.001）であった。総得点では有意差が見られた（114.0（83-142）; 107.0（85-131）,p＜.001)。5 年未満群は 5 年以上群に比べて有意にターミナルケア態度が低かった。

米国での調査は、コロナウイルス感染症流行の影響で研究協力が得られない事態に陥ったが、期間延長にて、新たな研究協力者が得られ、若干であるが米国でのデータが収集できている。データ収集が終了次第、データ分析、結果をまとめ、学会や論文として発表していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 大木友美
２．発表標題 急性期ケア看護師の経験とレジリエンス
３．学会等名 第367回昭和大学学士会例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大木友美、近藤暁子
２．発表標題 クリティカルケア看護師のレジリエンスとSOC(sense of coherence)
３．学会等名 第23回日本看護医療学会学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大木友美、近藤暁子
２．発表標題 看護師のクリティカルケア経験とターミナルケア態度との関係
３．学会等名 第23回日本看護医療学会学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大木友美、近藤暁子
２．発表標題 クリティカルケア看護師のターミナルケア態度と二次元レジリエンス要因との関連
３．学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大木友美、近藤暁子
２．発表標題 クリティカルケア看護師のターミナルケア態度に関連するレジリエンスの二次元構造
３．学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Akiko　Kondo, Tomomi　Oki
２．発表標題 Factors related to resilience of critical care nurses who take care of patients at their end-of-life：across-sectional study
３．学会等名 第４2回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	近藤　暁子 (Kondo Akiko) (70555424)	東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・教授 (12602)	
研究分担者	大滝　周 (Otaki Amane) (20644579)	昭和大学・保健医療学部・准教授 (32622)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	Texas University			